

「山吹の花」雑感

町方 和夫

「七重八重花はさけ共山吹のみの一つだになきぞかなしき」は太田道灌が金沢山に狩して急雨に遭い、篋笠を借ろうとして、村女から黙って差し出された山吹の花の意味が理解できず、その後、歌道に精進するようになったというので有名であるが、これは後拾遺集巻十九雑部に中務卿兼明親王の作として、

小倉の家に住み侍りける頃、雨の降りける日篋かる人の侍りければ山吹の枝を折りてとらせて侍りけり。心もえでまかり過ぎて又の日山吹の心もえざりしよしひおこせて侍りける返事にいひ遣はしける

の詞書をつけて採録されていることは周知の通りである。

兼明親王は醍醐帝の皇子で、天延三年に水を請うて祭文を作り、龜山に祈った所、忽ちにして湧出したという話の伝わっている方である点から判断して、この歌もおのずから水の祈請と関係があったろうことはさほど推測に難くはないだろうと思われる。

後拾遺集にはつきりと作者の創作意図までが出てゐるのに、どうして太田道灌の伝説へ発展していったのか、一体山吹の枝を手折って差し出した人(女)はどういう階級の女なのか、道灌が立ち寄ったのは農家だから農家の娘だろうくらいでは単純すぎはしないだらうか。

いや、一歩ゆずって、農家の娘にしても、古歌の意を知り、それを手折って差し出す才覚があったかどうかについては疑念が少くない。恐らくは、なりは農家の娘風であったにしても、何らかの系譜のある女ではなかったかと思われる。また、兼明親王にしろ、道灌にしろ、詞書や伝説の如く、実際に篋を借りるために立ち寄ったのか、その必要性が一応の問題になるだろう。

折口博士は「古代研究」中の「国文学の発生」(≡篋笠の信仰で「遠い国から旅をして来る神なるが故に、風雨、潮水を凌ぐ為の約束的の服装だと考へられ、それから篋笠を神のしるしとする様になり、此を著ることが神格を得る所以だと思ふ様になったのである」と述べておられるが、不浄を受けとめるものとしての篋笠をつけてこなたからかなたへの旅の安全を願った感情が、昔話「彦市ばなし」の隠れ篋の話へと発展したのであろうし、拾遺集巻十八には平公誠の歌がその感情をはつきり表明したものと云える。「隠れ篋隠れ笠をも得てしがな来たりと人に知られざるべく」は路次における災難を避けるべき百鬼駆除、旅の安全を守るための隠れ篋隠れ笠であり、そうした風習上の要素を持つものと共に歌われている山吹の花にも何かそうした厄除的要素が含まれていたのではないかと思わ

れる。万葉集卷二十に採録してある置始連長谷の歌の如く、挿頭にすることも多かったと思われるし、山吹が咲き匂っている間は何の懸念もなく通い得たようだし、「大和物語」にみられる安達の原の黒塚の魂の段になると、「花ざかり過ぎもやすると蛙鳴く井手の山吹うしろめたしも」と不安がる歌があるが、「花ざかり」が女盛りを比喩した歌とはいえ、厄除の要素を持つ山吹の痕跡をはっきりと示してくれているのではないだろうか。これが更に、戦国の世となり、戦場を遍歴する武士時代にはいると、「梁塵秘抄」卷二に見える「鞞の冠者の君、何色の何摺か、好う給う、着まほしき、麴塵山吹止め摺りに、花村濃……」や「武者の好むもの、紺よ紅山吹濃き蘇芳……」の歌謡は山吹の伝承性を示すものではなからうか。

「延喜式」によると、歎冬花 也末布支 也末布々木 とあり、鶏頭子 美津不支、桔梗 阿利乃比布岐とあり、「本草和名」も殆んど同様にのべており、更に牛蒡 宇末布々岐、蒨 布々木 とのべている点から「フキ」「フフキ」について考えてみなければならぬのではないかと思う。

万葉集卷一、卷四にみられる吹茨（吹黄）の刀自の性格は今日なほ未詳として取り扱われているが、「フフキ」「フキ」との関連から何かの結論めいたものはひきだせないだろうか。これは大胆無智な言辞を弄する結果になるが、素人のそれとしてお見逃しいただきたい。

「催馬楽」の律 十九近江路に「近江路の 篠の小薮 はや曳かず 子持 待ち瘦せぬらむ 篠の小薮や さきむだちや」における「さきむだちや」を解決するのが藪（フフキ）の性格解明の鍵ともなる。 「催馬楽」における「さきむだちや」は「沙支茨太知也、

左支无多知也、左支无太知也」の三種の表記法を用いているが、この意味は今日まで唯言葉として意味を持たないものとされており、万葉集（二四〇）家持作の「茅花を喫めどいや瘦せに瘦す」の例があるところから歌謡の意味も「その妻のため、藪をたべさせよう」（小西甚一氏）とされているが、「さきむだちや」を単なる唯言葉としては疑問があるのではないか。それは、その後の「更衣」（ころもがへ）「更衣せむや さきむだちや 我が衣は 野原篠原 萩の花摺や さきむだちや」を同時に考えあわせてみると、ある特定の人に呼びかけている風が多分に感じられる。「催馬楽」の一面の性格からして、旅との関係を無視しえない点、更衣が衣類を交換して銭別とした点から「さきむだちや」は「先達 はや」で旅の先導者への呼びかけであり、「篠の小薮」は旅の厄除物で、今まで近江路の路傍に生え繁っていた小薮が途絶えて不安がり、子持の妻が待ち遠しがっているにちがいない思国の旅人の心中を訴えているわけである。この点からして、吹茨（吹黄）の刀自は湯都磐村に斎き、旅人の不安を解消し、吉凶をうらなう巫女としての常処女ではなかったかと思われるし、「古来風体抄」が引用している「俊賴口伝」における「水の上にやしるをいはひて夏神楽をする。（中略）きよき川にさかきをたて、しのをおりてたなにかけて神体をそなふ」川社の斎事が首肯できるのであるのではないか。

この吹茨（吹黄）の刀自の性格が更に進展してくると、後選集卷十七に採録されている檜垣姫の歌となる。

筑紫の白川といふ所に住み侍りけるに、大式藤原興範朝臣のまかり渡る次いで、水食べんとて打ち寄りて乞ひ侍りければ、水持て出でて詠み侍りける

年経れば我が黒髪も白川のみつはくむまで老いにけるかも

は「水波む女」へと発展して行く過程を示してくれるものとして重要な位置をしめるものである。そこで、山吹の花枝を手折って差し出した人（女）は吹矢（吹黄）の刀自——檜垣の姫系統の女ではなかったかと推測される。この推測を補助する歌として、万葉集巻二の大海の皇女の歌「磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありといはなくに」の左註「蓋し疑はくは、伊勢の神宮より京に還り給ひし時、路の上に花を見て感傷哀咽してこの歌を作りませるか」は大海の皇女の旅の心中が察せられるばかりか、吹矢（吹黄）の刀自——檜垣姫系に包含さたる。逆に言えば、吹矢（吹黄）の刀自、檜垣姫は伊勢の斎宮に仕えた巫女の系統と言えるのではない。

先程から述べてきたように、山吹が旅の安全を祈願する川社（神籬）に関連のある点は首肯できると思うが、山吹だけがそうした特定の性格を持っていたかどうかについてはなほ疑問がある。おそらくは、山吹だけが特定の意義を持っていたのではなく、馬酔木、合歓木、芽子、紅葉をはじめとして路傍の草木はみな「にへくさ」としての意義を持っていたとみなした方が理にかなっていないはしないだろうか。土佐日記に、かじとりが「この幣の散るかに御舟すみやかに漕がしめたまへ」と祈願している点、伊勢集の「嘆をばなでて被ふる大幣は早河の瀬に流れ出にけり」のように、奈良時代後期以後は一般に幣帛を「天地の神も助けよ」（万葉集・巻四、五）とばかりに捧げたようであるが、それでもなほ「秋深く旅行く人の手向には紅葉に勝る幣なかりけり」（後撰集）や「春霞立ち分かれ行く山路は花こそ幣と散り紛ひけれ」（拾遺集）などでもわかるよ

うに、意識的に草木を幣として使用している。「離れにし妹」を偲び、「吾子真幸くありこそ」と斎っている歌が万葉集にみられるが、旅の途中においては神籬（川社）をたてる事もなく、水を掬ったり、草木の花枝を流したりしていたのではない。神楽舞をし、探物を川に流し、我が心を神の前にふれさしめ、そのものの浮沈、あるいは停滞の有無によつて生命の安全をうらなつたことは、仁徳紀に見える笠の臣の祖具守が瓢の浮沈でもつて大乳（おほいなるみづち）を退治した説話、瓢の中をくりぬいて水に浮べ、堰堤修復の人柱となるを免れた話は発生的には同系統の説話的伝承性をふくんでいはいないだろうか。

このように見てくると、「実のつただになきぞ悲しき」は智略に長けた武將道灌の非業の死を暗示したもとして伝説化されたと思つてよいのではない。

万葉集、巻八、一四三五、厚見王の「蝦鳴く甘南備河に影見えて今か咲くらむ山振の花」について少しく検討してみる必要があるのではない。これらの類歌は多いが、二つ三つ記しておこう。「吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへ変るひにけり」（古今集）「花盛りまだも過ぎぬに吉野川影に移るふ岸の山吹」（後撰集）「春ふかみ神なび川に影見えてうつろひにけり山吹の花」（金葉集）などがあつるが、わけても、「春暮れぬ今や咲くらん蛙鳴く神奈備川の山吹の花」（千五百番歌合・俊成）は厚見王の歌に最近距離にあるのではないかと思われるが、厚見王の歌が荘厳な重量感に溢れた情景を描き出しているのに比して、俊成のは小手先の器用な技巧的な歌で軽浮の感を免れない。これは俊成が「古来風体抄」に俊頼口伝より川社についての見解を引用しているながらも、神奈備川の山吹の花の伝承

的意識を考慮しえなかつたところに、誤算を生じ、ただ暮れ行く春のみを強調して、情感の盛りあがらない、響きの乏しい作品になつてしまつたと言えよう。

前記の四首に対して、「駒とめてなほ水かはむやまぶきの花の露そふ井手の玉川」(新古今集)「ささのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」(古今集)「さひの隈ひの隈川に駒とめて駒に水かへ我よそに見む」(万葉集)「河蝦鳴く清き河原を今日見ては何時か越え来て見つつ思ばむ」(万葉集・巻七、二〇〇)などは「神籬をたてて齋ふ」形式を採らないながらも、風習上の神おろしの儀式を想起して、旅情をなぐさめたもので、風習が文芸様式に溶融して、自然的に情感の高潮を表現したもので伝承的性格の強い歌である。歌それ自体は草木の信仰的要素による発想は弱く、旅中の不聊を即興的遊戯的な発想で風習を盛り込んだ野性味の溢れたのが多い。記紀に見られる倭建命の思国歌「熊白橋が葉を鬘華に挿せその子」は命を全うして無事に帰郷し得た人人は、以前出發する際に神籬をたてて齋つたあたりのくまがしが葉をうずさして、神樂舞をとりおこなうを指示した歌であるが、くまがしが葉に特別の信仰上の要素が含まれているわけではない。

「影をだに見む」は「よそに見む」の変形した流伝であるといふ。「よそに見む」は檜の隈川の神籬のあたりに駒とめて水を飲ませなさい、そうしたあなたの姿をよそながら偲んで旅行くあなたの無事を祈つておこなうという意味になるが、新しい土地を通過するに当たつてのみそぎの風を残しているのではないかと思われる。これに対して、「影をだに見む」は、風習上の意味は消えて、単に旅行く人の面影をしのぶ意にとどまつてしまつたものとみてさしつか

えなからう。新古今集巻二「やまぶきの花の露そふ」は、山吹で有名な井手の玉川は花の露をつけ加えて流れているが、以前と同様に今度もまた駒をとめて水を飲ませようと旅の安全を祈願する風習を想起した上で詠まれた歌である。そこで、万葉集厚見王の歌「神奈備川の山吹の花」は「実ならぬ樹にはちはやぶる神ぞ著くとふ」古代風習をふまえて、遠く「目離れにし妹」の心情を思いやり、妹になりかわつて詠みあげた歌とみるべきではないかと思う。だから、一首の意味も、蝦の鳴く甘南備河に(神籬たてて水掬う)あなたの面影がしのばれると同時に今を盛りにきつと咲いているにちがいない神奈備河の山吹の花が想像されますよ、多分あなたは安全な旅をなさるでしょうよ、といった風の内容の歌ではないかと思われる。この歌も思国歌の一種で、創作意図を持つた変形ではないかと思われる。

やが、十世紀後半にはいると枕草子百二十六段「山吹の花びら只一つ包ませ給へり。それに『いほで思ふぞ』と書かせ給へる」にみられるように「問へど答へず口なしにして」と関連づけてしまい、単に言葉の綾として遊戯的、技巧的に安否を気遣う創作文芸としての表現技術に固定してしまい、完全に思国歌としての意義は消滅してしまつたのではないだろうか。